

追憶

竹を割ったような実直な人
熊谷一彌さんを偲ぶ

岡部 陽二

熊谷一彌さんが昨年2月に97歳でお亡くなりになりました。天寿を全うされた静かなお別れでした。生前のご厚誼に感謝し、私事の記憶を辿って思いつくままで、ご披露させていただきます。

熊谷さんとの最初の出会いは、東京外国部次長で国際関係のMOF担を務めておられた1960年代に遡ります。当時は外為取扱店の増設や海外拠点の展開など何事も大蔵省の事前了解を取りつけないと、ことが進まない時代でした。ところが、住友銀行の本店機能は大阪にあり、当局との折衝窓口を東京に置いていたのです。大阪の外国部で企画を担当していた若造の私が考えた当局への申請書案を「こんなものはダメ」と突き返すのではなく「こうすれば通るよ」

と明晰な頭脳で親切に指導していただいた大先輩の実直さに感激したことを今でも覚えています。

次は、67年に加州住友銀行ロサンゼルス支店長として赴任され、毎月のように進出してくるトヨタなどの日系企業と地場の大企業取引開拓に外国課長の私を引っ張り回していただき、業容が一举に拡大した記憶です。からっとしたご性格がお客様の氣に入られ、その成果に繋がりました。

お客様や仲間との飲み会などにも、熊谷さんご自身は一滴もお酒を召し上がらないにもかかわらず、喜んで参加され、場を和やかにする努力を惜しまれませんでした。このご努力は生涯一貫して続けられ、氣さくでさばさばしたご性格は誰からも愛されていました。

エール・フランスのスケジュールデスクとしておられた美貌の奥様とは晩婚で、ロサンゼルスでは、子供たちが同年齢であったため、家族ぐるみのお付き合いをさせていただき、公私ともお世話になりました。

その次は、71年にブラジル住友銀行の頭取に就任された時でした。この銀行は日系移民を基盤とする中小銀行を58年に買収したものでしたが、熊谷さんはブラジル経済の将来性は

明るいので、地場企業金融や投資銀行業務にも今のうちに手を付けておくべきではないかと提言をされ、この可否を検討するための調査スタッフの派遣を本店に要請されました。その結果、私を団長とする4名での「ブラジル調査団」が丸1ヵ月かけてブラジル全土を駆け巡り、投資銀行業務への進出などの提案を行いました。熊谷さんのお陰でまたとない経験をさせていただきました。

84年には、ニューヨーク駐在を終えて、国際総本部長として国際業務全般を統括され、私はロンドン支店長としてお仕えしました。86年、住友銀行はゴールドマン・サックスに12.5%の資本参加を行い、これが投資銀行業務進出への足掛かりとなっただけでなく、15年後の売却時は巨額の利益をもたらしました。当時、熊谷副頭取は、この大プロジェクトの実現へ向けて小松康頭取を強力に支えられていたのが強く印象に残っております。

熊谷さんのお考えは、常に大先輩の高橋忠介さんの警咳に接して叩き込まれた真つ当でオーソドックスなもので、私情を排した裏表のない正論でした。

87年にご退任後は、明光証券の会長にご就任されました。ロンドン現法を発足させるなど国際化に注力され、

89年には銀行系証券子会社としては異例であった東京証券取引所上場を果たされました。上場後の株価も順調に値上がりし、上場の成功を心底喜んでおられました。

91年に同社退職後は大手町建物の社長・会長などを引き受けながら、晴耕雨読で、SF小説などを原書で楽しんでおられました。

ゴルフでのお付き合いは長く、ロサンゼルス時代から何十回と一緒しましたが、帰国後は中津川カントリークラブで熊谷さんを中心とする「中津川インターナショナル・クラブ(NIC)」が2002年に立ち上げられ、毎月例会が行われておりました。私も誘っていたが、発足2年後に入会、14年に87歳でお辞めになるまでほとんど毎月コンペで一緒しておりました。この間に熊谷さんは5回優勝されていますが、晩年には毎回私とブービー賞を争う好敵手で、私を1打でも上回ればご満悦でした。

国際化ともに夢見し雪の原 陽二

熊谷一彌さん、どうか安らかにお眠りください。